

2025 ズバリ! 的中



世界史

同志社大学

「中世ヨーロッパ文化」に関する リード文の空所補充がズバリ的中

入試問題

2月10日実施 社会学部
大問 I

〔 I 〕 次の文章を読み、設問 1～11に答えなさい。

ビザンツ帝国やイスラーム圏から西ヨーロッパ世界にはイスラーム科学の学術書やギリシアの古典がもたらされ、それらがトレドやパレルモで翻訳されるようになるとともに、これに刺激されて学問や文芸も大きく発展した。こうした学問や文芸の興隆を という。

このようにして学問が発展するなかで、スコラ学はアリストテレス哲学の影響を受けて壮大な体系となり、『神学大全』で知られる (f) により大成された。その一方で、イスラーム科学の影響を受けて実験と経験を重視する (g) の自然科学は、この後の近代科学を準備するものとなった。

また、学者・知識人たち、あるいは学生の自治組織から大学が誕生した。おもな大学には神学・法学・医学の3つの学部があり、基礎的な教養科目として文法学・修辭学・論理学・算術・幾何・天文・音楽からなる も教育された。

(e) 語が学問の国際的共通語として使用される一方で、多くの人びとはそれぞれの地域の言葉としての俗語を使用した。とくに君主の宮廷では、俗語にもとづいて、騎士の倫理や道徳を歌い上げる騎士道文学が愛好された。たとえば、カール大帝時代の騎士の武勇をたたえる『(h)』やゲルマン人の英雄の伝説をうたう『(i)』、そしてケルト人の英雄の伝説を下敷きにした『(j)』がある。

設問 1 文中の (a)～(j)に入る最も適切な語句を次の語群から一つずつ選び、番号を解答欄 I-A に記入しなさい。

設問 10 文中 に入る適切な語句を解答欄 I-C に記入しなさい。

河合塾

大学受験科 基礎シリーズ
世界史 演習編 第11講 ☆中世ヨーロッパ文化

☆ 中世西ヨーロッパ文化

〔1〕 学問と大学

中世の西ヨーロッパでは、教会(カトリック)の権威が絶大であった。そのため中世の学問は、「哲学は神学の婢」という言葉が示しているように、神学が最高の学問とされた。中世初期の神学は、カール大帝がイングランドからまねいた神学者 (1) らによって発展し、(2) 語による文芸復興(カロリング=ルネサンス)が起こった。教会の権威の理論的確立をめざし、信仰の論理的体系化をすすめるスコラ学もこの頃から始まり、キリスト教の信仰と理性の調和をめざした。アンセルムスを代表とする (3) 論と、アベラールやウィリアム=オブ=オッカムによって代表される (4) 論との普遍論争はその例である。12世紀にはビザンツ帝国やイスラーム世界からもたらされた多数のギリシア古典やイスラーム学術書が、イベリア半島のトレドやシチリア島のパレルモなどでアラビア語から (2) 語に翻訳されたのを背景に、学問や文芸が大きく発展したことから「12世紀ルネサンス」と呼ばれる。こうしてギリシアの (5) の哲学が神学にとり入れられるようになり、13世紀にドミニコ会のトマス=アクィナスは、『(6)』を著してスコラ学を大成した。

13世紀以降は医学や天文学などの分野でイスラーム科学の影響もあらわれ、それまで衰えていた自然科学の研究もしだいに進むようになった。実験と観察を重んじた13世紀のイギリスのスコラ学者 (7) は、新しい自然科学の第一歩を示したものといえる。

中世の大学〔(2) 語でウニウエルシタス〕は、教会や修道院の付属施設として始まり12世紀頃から各地に設立された。当時の大学は、教皇や国王の特許状によって設立された一種のギルドであり、教師や学生の自治的な団体という性格をもっていた。大学には、7自由学科を学ぶ人文学部(哲学部)と、専門課程として神学・法学・医学の3学部があり、フランスの (8) 大学やイギリスのオクスフォード大学は神学、北イタリアの (9) 大学は法学、南イタリアの (10) 大学は医学で名声を博した。なお、中世の大学での講義は (2) 語で行われていた。

〔2〕 美術と文学

中世ヨーロッパ美術は、キリスト教聖堂の建築を中心に発達した。初めはコンスタンティノープルの (1) 聖堂やラヴェンナのサン=ヴィターレ聖堂に代表される、モザイクや円屋根(ドーム)を特色とするビザンツ様式が普及した。11世紀頃からはイタリアのピサ大聖堂やドイツのシュパイアー大聖堂のように、重い石の天井に半円状アーチと厚い壁を特色とする (2) 様式が現れた。さらに12世紀末以降は、北フランスを中心に尖頭式のアーチと大きな窓にステンドグラスをはめ込み、垂直線の美を強調した (3) 様式が支配的となった。フランス北部のランス大聖堂やパリのノートルダム大聖堂、ドイツのライン川沿いにある (4) 大聖堂はその代表例である。

また文学の面では、主にラテン語を用いた諸学問に対して、口語(俗語)で表現された中世文学の代表が騎士道物語で、ブルグンド人の悲劇をえがいたドイツの叙事詩『(5)』、カール大帝のイスラーム勢力との戦いで活躍した騎士をえがいたフランスの『(6)』、ケルト人の王を主人公とする『(7)』が知られる。また、恋愛をうたう叙情詩が宮廷をめぐる吟遊詩人によって歌われた。